



水俣を歌う、柏木敏治さんの活動 水俣病事件と「表現」活動について

高橋, 綾

(Citation)

哲学対話と当事者性：2019-23年度科学研究費補助金基盤研究(B)（課題番号19H01185）「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察」研究成果報…

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486367>



水俣を歌う、柏木敏治さんの活動

水俣病事件と「表現」活動について

高橋 綾（大阪大学）

1 はじめに

2020年初旬からのコロナ禍のなかで、人々が集まって話し合うという対話の活動は行いにくくなりました。そんななか、わたしはコロナ感染対策で行動や集まりが制限されるなかでもできることを探し、活動を続けるとともに、そもそも対話やさまざまな人の声を聴く活動を通じて自分が何をやりたかったのだろうと考え直していました。そして、移動制限がやや解除された2022年3月に、大阪大学の大学院生や教員とともに水俣の水俣病センター相思社を訪問し、以下で紹介する水俣在住シンガーソングライターの柏木敏治さんと出会いました。柏木さんの歌を相思社の座敷で初めて聴いたとき、わたしは、その歌に、対話の実践を通じて自分がやりたかったことと通底するものがあると勝手に直感し、すっかり柏木さんや柏木さんの歌に出てくる水俣の人々のファンになってしまいました。それから、数回水俣を訪れ、柏木さんの楽曲や活動について、柏木さんご本人や歌詞を提供した水俣病患者・家族から聞き取りを行い、楽曲のアーカイブも行っています。この小文では、水俣の歌を歌う水俣在住シンガーソングライターの柏木敏治さんの活動や、水俣病患者とそれを支える人々がともに行う活動としての「表現」活動について紹介したいと思います。

2 柏木さんとの出会い

2022年3月、コロナ感染対策の移動制限が少し緩和された頃に、大阪大学の大学院生3名と教員3名で水俣病センター相思社を訪問しました。水俣病事件について学ぶことが目的でしたが、その中でも、私たちの関心は、水俣病を生き残った人々の「表現活動」に関心がありました。あとに述べるように、1990年代の水俣では「本願の会」を中心に、水俣病事件についての「表現活動」がさかんだったのですが、この時の私たちは不勉強でそこまでは知りませんでした。私たちが共通に関心を持っていたのは、Zineや聞き書きなど、手作りのパーソナルな表現活動でした。水俣病事件については、写真、映像や、文学など、さまざまな表現活動が多く行われていたため、水俣在住で、そういった表現活動を行なわれている方がいたら紹介してほしい、とお願いしてあり

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

ました。相思社の方にこの少し変わった訪問目的を伝えた時には、どのように案内したらよいのか、戸惑われたとのことでしたが、それで偶然、この文章の主人公である柏木敏治さんと出会うことができたのだから、偶然と相思社の方の思いつきに感謝するほかありません。

先に訪問していた鹿児島を出発した我々は、不知火海を眺めつつ国道3号線を北上、水俣に入りました。家々や一階建ての県営住宅、畑のなかをぬって細い道をこわごわ上がり、相思社に到着。「水俣病センター 相思社」と聞いて、わたし自身が勝手にもったかしこまった施設を想像していたせいで、まずは、相思社の建物が周りの風景に馴染んだ平屋の古い民家だったことに驚きましたが、いい意味でさらに驚いたのが、宿泊場所である座敷に案内された時、迎えてくれた相思社のスタッフの葛西さんが、仏壇を指し「ここには、水俣病の患者さんやゆかりのある方の位牌が収めてあります。ほら、これは～さんの位牌、こっちは土本監督の、猫実験の猫の位牌もあります。」とそれぞれの位牌を取り出して見せてくれたことでした。近代日本を象徴する社会問題としての水俣病が、地元の固有名のつながり、しかも座敷の仏壇の位牌を通じて語られる、というギャップに衝撃を受けたのでした。あとに述べるように、この水俣における固有名のつながりは、柏木さんの表現活動にも関わってくることで分かります。



相思社の座敷で演奏をする柏木さん

葛西さんに水俣のまち歩きをしてもらい相思社に戻ると、さきほどの仏間の座敷で、ギターを持った人が我々を待っていていました。この人が、水俣や水俣病患者さんの歌を歌っている柏木敏治さんでした。柏木さんはあまり多くは語らず、ほとん

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

どすぐに歌を歌い始めました。友人の水俣病患者さんのことを歌った「汗でよごれたミノルタカメラは君の瞳」「舟の名前は」、胎児性患者の坂本しのぶさんの詩に曲をつけた「これが私の人生」、多くの説明がなくても、しみじみ感じるところの多い歌が続きました。なかでも強く印象に残ったのは、劇症型で亡くなった祖父についての緒方正実さんの語りから作った「福松じいさんの焼酎」を歌うために、柏木さんが緒方さんから、歌に出てくる焼酎の実物（ガラスケース入り）と、福松さんの遺影を借りてきてくれたことで、そのローカルなつながりに感銘を受けました。このことでもですが、柏木さんの歌を聴くと、「水俣病患者」一般が存在するのではなく、水俣では、患者さんたちが「女島の〇〇さんのおじいさん」というように、地域のつながりのなかで、固有の名を持つ〇〇さんとして知られ、語りつがれているのだということがよくわかりました。しかもその人たちは、ただ水俣病患者としてだけ生きているのではなく、誰かの子ども、じいちゃんばあちゃん、友人として、水俣の自然や風景に愛着を持って生き、ある人はチッソによって活気があった時代に愛憎半ばする思いを抱え、ある人は患者運動に自分の比重をかけすぎたり、また自分を取り戻したりしつつ、水俣病をそれぞれのしかたで生きているのだ、ということが伝わってきました。こうして、わたしは、当初予想もしなかつたかたちで、水俣、水俣病にまつわる固有名のつながりや、柏木さんの表現活動に出会い、そこから、もう一度水俣病事件について学び直すとともに、他者と聞きあい語りあう活動のなかで生まれる個々人の「表現」について考え直すことになったのです。

3 柏木さんの活動・楽曲について

これ以降は、柏木さんの水俣を歌う活動やその経緯、変遷、そこから生まれた楽曲について、柏木さんからの聞き取りやその他の文献・資料をもとに紹介をしてみたいと思います。柏木さんの楽曲は、あくまで歌われるためのものであり、ここで紹介する歌詞・詩が、メロディ・リズムをつけて、柏木さんや誰かの声で歌われることではじめて感じられる意味や情緒があるのですが、ここでは、歌詞・詩のみ紹介をします。また、柏木さんが作ってきた楽曲は、わかっているだけでも70曲近くある¹ため、ここで紹介する楽曲はその一部でしかありません。

3.1. ある土地に根づいた民衆の暮らしを歌う、フィールドフォーク

柏木敏治さんは、1955年に水俣に生まれ、そこからさまざまな仕事（一番長く勤めたのは、水俣の森林組合という自然に関わる仕事）をしながら水俣で暮らしておられます。音楽が好きな若者だった20代の柏木さんは、1970年代に水俣病をテーマに歌を歌っていたフォークシンガーの黒坂正文さんに出会い「音楽に関心があるなら、水俣の歌を歌ってみたら」と言われたことから水俣をテーマにした歌を作り、歌うことを始めることになったそうです。

60～70年代の日本はフォークソングムーブメントの真っ只中でしたが、このムーブ

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

メントの中に、政治的なメッセージを含むプロテストソングや、70年代後半に商業化され流行する、都市で暮らす個人の心情を歌うシティポップス・ニューミュージックだけでなく、アメリカのフォークソングの原点に帰り、ある土地で暮らす、庶民や民衆の価値観、生活に根差した歌を歌うという〈民衆の歌・表現〉に関心を持ち、活動していた人たちがいたことは現在ではあまり知られていません。柏木さんは、先に書いた通り、民俗学者の宮本常一に薫陶を受け、その土地土地の文化を歌にして歌っていた黒坂正文さんや、民衆のプロテストソングとしての替え歌や生活綴方運動に関心を持ち、土地の民謡（民衆の歌）を採取し、「もともと歌は大地の上にあったはずだ、大地の上でうたおう」と呼びかけて、商業化に抗い「フィールドフォーク」という活動を行っていた笠木透さん²のような人たちに影響を受け、音楽活動を始めました。柏木さんの音楽活動は、水俣の「フィールドフォーク」、水俣の人々の暮らしや価値観を歌う、というところから始まり、それが水俣病事件や水俣病患者さんの人生を歌う歌などに展開していくことになります。

20代の柏木さんは、「水俣おたま座」というグループに属し、黒坂正文さんとともにライブアルバムを出すほか、ご自身のおばあさんから聞いたことを元に、水俣の人々の昔の暮らしをテーマにした「まんまんちゃん」「はがま」を作っています。その一方で、1977年から始まった水俣湾の埋め立てについての歌「水俣ブルース」、水俣出身の詩人淵上毛銭の詩に曲をつけた「重太んどん」などもこの時期の曲です。ちなみに、水俣は石牟礼文学だけでなく、土地に根差した文学表現・文学者にも恵まれた場所であり、柏木さんの曲のなかには、水俣出身・在住の詩人、淵上毛銭や吉津隆勝の詩に曲をつけたものも多く存在します。

次に紹介する「はがま」という曲は、柏木さんが20代にご自身の祖母に話（今で言うライフストーリー）を聞き、戦時中に台湾に植民したときの暮らしぶりを歌ったものです。水俣病事件以前の水俣の人々の暮らしを歌った曲ですが、戦争のなか、食糧がなくても、台湾に植民することになっても、毎日働き、飯を作り、喰う、喰わせることでなんとか生きのびてきた庶民の暮らしが、「はがま」に象徴されて歌われています。

はがま 詞・曲 柏木敏治

53年の年月が流れ 薪の煙で黒々と その当時で高いはがまがある
二十歳で嫁に来たという 53年間飯を炊いた
台湾の土をもついた 古い古いはがまがある
一口食べれば生きている証が 何とも言えない焦がれめが
何人もの人がこのはがまで 飯を喰ったのだ

はがま はがま つらい世の中を はがま はがま お前は生きてきた

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

はがま はがま あの山に 再び煙を上げておくれ

配給米のときもあった ふかしいもばっかりのときもあった

とにかく 53年間という長いあいだ 働いてきたのだ

今では穴が開いてしまったが 今はいないじいさんやその子ども

ばあさんがつくるあのうまい飯を また喰わせてくれよ

はがま はがま つらい世の中を はがま はがま お前は生きてきた

はがま はがま あの山に 再び煙を上げておくれ

じいさんやばあさんが住んでいる あの袋岡山開拓団³

もう一つの曲「建てまっしょ」という曲は、1986年の水俣病公式確認30年の際に、水俣在住の詩人、吉津隆勝さんが出した詩集『浜木綿の歌 水俣病30年に寄す』に収録されている詩に柏木さんが曲をつけた歌です。吉津隆勝さんは鹿児島や水俣で高校の先生をしながら詩を書き、詩集を出しておられた方です。柏木さんはこのように、水俣弁（水俣の方言）を歌にする、ということも行なっています。標準語とは異なり、水俣弁は、水俣の人々の暮らしに根付いた〈生活語〉⁴であると言えます。この水俣弁でなければ、この歌の魂、亡くなった大小の魂への慕わしさと追悼・鎮魂の気持ちは表現することができないのではないかと思われ、土地に根差した歌、「フィールドフォーク」の本質とはこういうものではないかと考えさせられます。水俣病事件でそこなわれた大小のいのちに思いを寄せるということが、標準語ではなく、水俣の人々の暮らしに根付いた言葉で表現されるということに、大きな意味があるのではないかと思わされる曲です。

建てまっしょ 詞 吉津 隆勝 曲 柏木敏治

水俣ん海ん真ん中に 太か墓ば建てまっしょ

不知火の燃え立つ海に 魂の墓ば建てまっしょ

ピラミッドのように天にとんがった墓にしまっしょ

すきとおったガラスの墓がよかですばい

そげえみんな入れてやんなっせ 父ちゃん母ちゃんのやさしか魂ば

爺さん婆さんの皺んよった魂ば 子どもたちん むぞらしか⁵魂も

魚たちの宝石のごたる魂も 入れてやんなっせ

寂しか夜は月や星ば映して

キラキラ光ってそりゃあ美しかですばい

世界中から見ゆる墓がよかですな 地球のすべてん人ん瞳がキラキラ

輝いて映る墓がよかですな 不知火のチロチロ映る墓がよかですな

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

水俣ん海ん真ん中に 太か墓ば建てまっしょ
不知火の燃え立つ海に 魂の墓ば建てまっしょ

3.2. 水俣病の胎児性患者さんの友人・伴奏／伴走者として、ともに「表現」を生み出す

80年代の前半にレントゲン技師の助手として水俣病患者の往診についていていた時に出会った胎児性患者さんの宮内一二枝さんとの別れ（29歳でお亡くなりになった）から、柏木さんは、初めて「レクイエム」という、一人の水俣病患者さんの人生を想う歌を作りました。また、この時期以降、柏木さんは、地元で暮らしていた同年代の胎児性患者さんたちと親交を深め、共に活動するようになりました。この交流から、写真が趣味だった半永一光さんの写真集出版を祝って作った「汗で汚れたミノルタカメラは君の瞳」、明水園（水俣病患者さんたちの入所施設）の名物男、鬼塚雄二さんの書いた詩に曲をつけた「安心の歌」など、水俣病とともに生きる一人一人の人生や生活を歌った歌を作るようになります。また、ほぼ同時期に作られている「カシオペアの詩」は、柏木さんもメンバーとして活動していた、胎児性水俣病患者さんや身体障害者の人たちのグループ「カシオペア会」のために作られた歌です。このように、柏木さん自身は水俣病患者ではありませんが、患者さんの「支援者」という立場ではなく、「友人」や「伴奏／伴走者」として、水俣病のことや水俣病患者さんの一人一人の人生を歌い続け、患者さんたちの表現を共に作っておられます。

次に紹介する歌は、1997年に胎児性患者さんの半永一光さんが写真集を出すことになったときに、柏木さんが作詞作曲してお祝いに作った曲です。半永さんは、石牟礼道子さんの『苦海浄土』に出てくる杵太郎少年のモデルにもなった人物で、事情により水俣病患者として声高に声をあげて主張することははありませんでしたが、写真が趣味で、身の回りのものを写真に撮っておられました。柏木さんによると、半永さんは穏やかな方であり、一緒にいると自分が癒されるような気になったということです。この楽曲を聴くと、写真を通じて現れていたであろう、半永さんの眼と心のなかにあるおだやかさを感じとることができます。また、そんな半永さんに心を寄せる柏木さんのなんとも言えない優しい気持ちが伝わってきます。この曲に表れている半永さんと柏木さんの関係は、支援者と水俣病患者、当事者と非-当事者といったものではなく、横に寄り添ってあり同じものを眼差そうとする関係であり、また相手の表現が生まれることを支え、喜びあう「ケア」的な関係であるようにわたしには思われます。おそらく、柏木さんにとって、歌うこととは、自分の主張を伝えるというようなことではなく、誰か（人だけではなく、動植物や自然を含む）のために歌う、誰かの声に自分の身体を貸して響かせる、共に響かせるという他者と共同でなされる表現行為なのではないかと思われます。⁶

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

汗でよごれたミノルタカメラは君の瞳 詞・曲 柏木敏治

君の瞳にうつる あざやかな春の色
それはきっと君の心が うつつているのだろうか
ふれあううちになぜか 心がおだやかになっていく
君にあげるものは何もない 何もないけれど

君のまぶたにうつる 海わたる風の色
おだやかな 光の海で じいちゃんと魚釣り
刺身をごはんの上に乗せて 熱いお茶かけて
君にあげるものは何もない 何もないけれど

君の瞳にうつる 茜色の流れる雲
無心にシャッターを押し続ける それには何が写っているのか
私もこの街に生きている 君もこの街に生きている

汗で汚れたミノルタカメラは 本当は君の心の眼
汗で汚れたミノルタカメラは 本当は君の心の眼

3.3. もやい音楽祭と水俣病患者の「表現」

次に、柏木さんの音楽活動の次の転機となるのが、2007年に水俣で始まった「もやい音楽祭」です。この音楽祭は、奈良の福祉施設、たんぼぼの家が主催していた「わたぼうし音楽祭」に触発されて始まったもので、水俣の水俣病患者さんや障害を持つ人たちが書いた詩を歌にして歌う音楽祭でした。この音楽祭を機に、旧知の水俣病患者さんの書いた歌詞・詩に柏木さんが曲をつけた「これが私の人生」（坂本しのぶさん）、「舟の名前は」（永本健二さん）「ピンクの花が好き」（前田恵美子さん）等の名曲が生まれました。残念ながらもやい音楽祭自体は、新型コロナウイルスの影響により、第13回以降は休止されていますが、第13回の時に作られた曲が、柏木さんが初めて会ったときに歌ってくださった「福松じいさんの焼酎」です。

「これが、わたしの人生」は、胎児性患者として、患者運動や認定訴訟、国際社会に水俣病事件を伝える活動にも取り組んでこられた坂本しのぶさんの詩に、柏木さんが曲をつけた作品です。ここでは、坂本さんは、今までの水俣病患者、患者運動のシンボルとしての「坂本しのぶ」ではなく、一人の個人として、自分の人生や生活を率直に振り返っておられます。水俣病患者、患者運動のシンボルとしての活動は、どこかで「だれかの言うがまま」になった面もあること、水俣病だけを特別扱いするのではなく「障害者への差別」と同じ問題として扱ってほしいこと、ただし、水俣病事件にはチッソや行政などの「加害者」がおり、それを伝える責任は自分にあると感じて

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

いることなど、水俣病事件の複雑な性質を思わせる様々な苦労や思いが歌われています。

また、水俣という地方や時代性もあり、障害者・患者の自立生活を実現することが難しく、したくてもできないことがあったこと、恋愛についての思いなど、ハンディキャップを持って生きる一人の生活者としての苦労や思いも歌われています。ただし、最後のサビでは、苦労や、叶わない思いがたくさんあったけれども、人とつながることを諦めず、みんなと「いっしょに手を繋いで生きたい」という気持ちや「これが私の人生」であり「じぶん自身でこの道を歩いて行」くという坂本さんの人生や他の人への主体的な関わりを望む気持ちが表れており、そこに胸を打たれる人は多いでしょう。また、坂本さんが人生を振り返り、そこからこれから先の在り方を見いだす心の動きが、柏木さんのつけたメロディーによってより強く伝わってきます。

このように、当事者の「表現」とは、水俣病患者といった一般的な属性を代表する「主張」ではなく、あくまで被った困難や苦労を自分はどう生き抜いてきたかという一人一人の生活、生き方を表すものであり、社会に対して何かを訴え、変えるというより、このような「表現」を生み出すなかで、自分に向き合い、自分の生き方を作り上げなおしていくためにあるものではないかと思われます。

これが、わたしの人生 詞 坂本しのぶ 編集・曲 柏木敏治

※第1回(平成19年度)もやい音楽祭作詩の部・作曲の部入選

2年前からかな？ 去年からかな？ 水俣病の 50年だった
私にとって おそかったと 自分自身で歩いていくことが
いつも だれかの言うがまま ひとりで 歩いて行こうとせんじやったと
人のせいにする訳じゃないけど でも、やっぱり甘えた自分も悪い

自分の人生は自分できちんと考えて行きたい そう思うようになった
障害者への差別 やめてほしい水俣病も同じやな
なのにどうして私ばかり特別扱いするんだらう

友達も言いよったばってん 一緒に見てほしい
ただ、水俣病は、加害者がおり それを伝えるせきにんがあるから
今こうして話してる

みんな長く生きて 私をひとりぼっちにせんで
いっしょに手を繋いで生きたい あなたといっしょに

わたしも 鳥になっていろんなどころばみてみたいな 一人でアパートに住んで
こどもにもどって みんなとはしったり 恋の話もしてみたい
いつも自分から ひとを好きになりました

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

でも、50 歳になって はじめて告白されました
わたしはバカやっで 本気ち思っで浮かれて悩んで
本気も冗談もわからん女でした

いっぱいすきになって いっぱい好きになって それでもぜんぜん実りませんでした

みんな ながく生きてわたしを 一人ぼっちにせんで
いっしょに手をつないで生きたい あなたといっしょに

水俣病にならば、わたしの人生は でも、これが わたしの人生
これからは じぶん自身でこの道を 歩いて行きます
この道を 歩いて行きます

次に紹介する「舟のなまえは」は、胎児性患者さんの永本賢二さんに柏木さんが聞きとりをして二人で歌詞を作り、柏木さんが曲をつけた歌です。永本さんのお父さんはチッソに勤めておられ、水俣病で早くに亡くなられたのですが、そのお父さんが元氣だったころの思い出が主題です。こどもだったころの「僕」には、砂利積みのトラックの音、タグボートのエンジン音、安賃闘争（安定賃金闘争というチッソの労働紛争）でハチマキのおやじたちのガンバローの歌（筑豊炭田発祥の労働運動の歌）が聞こえる水俣は、経済成長・政治運動の時代の、対立はあっても、活気があるまちと映っていたのだらうと思われます。そんな活気があった水俣とそこで働き生きた親父を懐かしみつつ、チッソについては「憎らしいと思ったことはないけど もう二度とこんなことはしないで」と願う「僕」の複雑な気持ちは、おそらく少なくない数の水俣の人々が共有するものなのではないかと思われます。

内容もすばらしいのですが、この曲の歌詞について重要なのは、もやい音楽祭には永本さんの名前で応募されてはいるものの、柏木さんが永本さんの語りを聞きとって一緒に作ったものであるということです。水俣病患者さんのなかには、坂本しのぶさんのように自分で詩・歌詞を書かれる方もいますが、永本さんのように本人が語ったことを柏木さんが歌詞になるように助けているというケースも多くあります。こういった作り方では誰に著作権があるのか、当事者の語りを他者が「代弁」することで本人の思い、オリジナルな表現に変更が加えられてはいないか、というような疑問を呈することもできますが、わたしとしては、この歌詞は、永本さんと柏木さんが共同して生み出した「表現」であり、ある人の生き方が「表現」へともたらされる場合には、その人一人で成し遂げられる場合もあるけれども、その「表現」が聞き取られる場、つながりがあり、そこで表現することを支えあい、磨きあう共同性から生まれる「表現」もあるのではないかと肯定的に捉えています。

舟のなまえは 詞 永本賢二 編集・曲 柏木敏治

※第 2 回(平成 20 年度)もやい音楽祭作詩の部・作曲の部入選

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

ひなぎくの花 が好きで グループサウンズをよくきいた
特にタイガースが好きで たまにカラオケで歌う

昔は梅戸にすんでいて そこから見える広い海
砂利積みのトラックの笛の音 タグボートのエンジン音

安賃闘争の水俣 ハチマキのおやじたち ガンバローの唄
魚釣りが好きだったおやじ
僕が生まれた時は すごく喜んで
舟の名まえに 僕の名をつけた その名は「賢二丸」

小学生の頃は「ふたば」 5年で「すみれ」
よく嫌な言葉を投げつけられた「みぐるしかで 後ろば歩け」…とか
僕が水俣病を意識したのは 高校生の頃
それまでおふくろはそのことについて何もふれなかった 何故だろう？

親父がチッソに勤めてて 複雑な思いがあったんだろう
にくらしいと思ったことはないけど もう二度と こんな事はしないで
僕の心をなぐさめてくれるのは 窓から見えるあの大きなクレーン
砂利積みのあの大きなクレーン

安賃闘争の水俣 ハチマキのおやじたち ガンバローの唄
魚釣りが好きだったおやじ
僕が生まれた時はすごく喜んで 舟の名まえに 僕の名をつけた
その名は「賢二丸」
その舟の名まえは「賢二丸」

4 水俣病事件と「表現」活動

最後に、こういった柏木さんや水俣病患者たちの「表現」活動の背景にある人々、活動の一つとして、水俣病患者である杉本栄子さん、緒方正人さんたちの活動や考え方を紹介し、水俣病事件と当事者の「表現」について、少しだけ考えておきたいと思います。緒方さんや杉本さんは、柏木さんや患者さんたちの歌にもときどき登場するほど、胎児性患者さんや柏木さんに慕われた人たちです。それだけでなく、杉本さんや緒方さんは、ご自身の困難な経験から水俣病ということの本質を深く見つめ、葛藤し、平易な言葉で水俣病事件をどう生き抜くかについてについて探究し、「水俣病の思想・精神性」というものを語ってこられた方だと言えます。

4.1. 「水俣・本願の会」について

杉本栄子さんや緒方正人さんは、1994年に水俣病患者の田上義春さんや浜本二徳さん、石牟礼道子さんたちとともに「水俣・本願の会」を作っています。90年代というのは、当時の村山内閣によって未認定患者の救済策、いわゆる水俣病問題の「第一次政治決着」がなされるとともに、地元水俣では、「もやい直し」ということが言われ、水俣病事件によって分断されてしまった地域コミュニティのつながりを取り戻すということが目指されるなど、水俣病事件が、ある意味で新しいフェーズに入った時期だと考えられます。

この時期に水俣・本願の会を作った理由として、緒方さんは、「政治決着以降、かつてのような運動形態が終息して、いわば表現力、世の中に訴える力をもちえなくなっていくだろう」⁷という予想のもと、法廷闘争などの「制度的な手法でということではなく・・・ いろんな自由な表現形態から」⁸水俣病事件について考え、伝えていく「表現行動をする集団」⁹であると述べています。実際、本願の会は、鎮魂のための石仏を作って水俣湾埋立地に安置する、水俣病で犠牲になった全ての生命に祈りを捧げる「火のまつり」の開催、木造船日月丸での東京までの航海、石牟礼道子の能「不知火」の上演など、患者運動・法廷闘争などとは異なる次元で、水俣病事件のための「表現行動」を行いました。

緒方さんが特に「表現」ということを大事にする根本には、水俣病事件とは何かという大きな問いの前でご自身が苦しみぬかれた経験から見出したこと、すなわち、水俣病事件とは、個々の命や人を大事にする代わりに、経済効率や利便性を追求してシステム化された近代社会がもたらしたものであり、その責任を求めても「責任主体としての人間が、チツソにも政治、行政、社会のどこにもいない」¹⁰、逆に言えば、そのような近代の社会に生きる誰でもが被害者であると同時に加害者でもあるということ、そして水俣病事件の責任を問う患者運動や法廷闘争も、結局は裁判や金銭補償という近代のシステムのなかに取り込まれて終わったものとされてしまうという問題があります。緒方さんにとっての水俣病事件とは「さまざまな仕組みや制度が『人間として』あるいは『人として』という主体を覆い隠してしまった」¹¹ことがもたらす問題であり、水俣病患者だけでなく、すべての人が、それに抗して、組織やシステムのなかの役割、一部としての存在ではなく、ひとつのいのちとしての「個」にかえて、その自分を主体的に「表現する」ということが重要だという考えがあるからで



本願の会によって埋立地に安置された石仏

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

す。

また、石牟礼道子さんは、自分には、「文学の問題として、この国の近代というのは一体何であったのか」¹²というテーマがあり、本願の会とは、水俣病事件を産んだ近代の「産業構造とか、人間生活の変遷とか、それを全部、否定して考えたときに残るのは、どういう人間の欲求であろうか、どういう希望であろうか」¹³ということについて話し合い、「そこからなんとしても本質を表す言葉を生み出す」¹⁴、その言葉を聞き取る場所であったと言われていました。

一方、杉本栄子さんは、本願の会について、水俣病の患者運動が組織化されるなかで限界を感じ、支援団体・支援から離れて「生活にもどろい（生活にもどろう）」¹⁵と決め、漁師としての、家族での生活を大事にしていくなかで、本願の会のような、患者団体、運動団体とは異なる種類の地域の集まりに参加し、自分の思いを話すことや他のさまざまな人の考えから学ぶことの大事さを改めて見出すことになったとおっしゃっています。水俣病になった当初、どう生きるかを模索していた時期は「東京の人は偉かというか、学者は偉かっじゃとっていて」¹⁶専門家や学者、支援者に「任せていた」けれど、本願の会のような地域の集まりのなかで、標準語ではなく、生活の中から見えてくる言葉で水俣病事件について話し合うなかで、「行けば行くほど会がおもしろいんです。『やっぱり田舎ん者は田舎ん者で話し合わんばいかんね』」¹⁷と気づいたとも話されています。ちなみに、栄子さんのこの経験は、わたしの関心に引きつけていえば、専門家や支援者に苦勞の丸投げをするのをやめて、自分たちの言葉で自分たちの苦勞を語り、苦勞をとりもどし、深めていこうとするべてるの家の当事者研究を彷彿させます。

本願の会は、上に紹介したように、それに参加したそれぞれの人にとって少しずつ異なる意味づけや語り方がされていることが興味深いのですが、それは、患者運動のように一つのスローガン・目標のもとになされる集団行動ではなく、それぞれの人が「もう一度ひとりに立ち返」¹⁸って、水俣病事件について「自分自身で、ともに」¹⁹探究していく場であったからではないかと思われます。そしてこの場は、石牟礼さんが言うように、それぞれが水俣病事件をどう生きていくのかという「本質を表す言葉」、表現を聞き合い、生み出す場所であり、言葉だけでなく、石俣を作る、祭りや能などのさまざまな表現活動につなげる場所であったのではないかと推測されます。

杉本栄子さんは、本願の会で他の人と話し合うなかで、水俣病を語るのに、「水俣弁で、よかことばのある」²⁰ということに気づき、自分たちは生きているのではなく生かされているという認識から、水俣病さえも、自然から与えられたものとしての「のさり」だと捉えるという考え方や、「チッソを恨むな、（水俣病は）与えられたこつ（＝事）じゃなかかと思えば、人は変えられんで、自分が変わっていけ。そして生きていけ。」²¹というような知恵を見出し、周りの人に語っていくことになりました。そして、柏木さんは、栄子さんや緒方さんなどの知恵の言葉を編みあわせて、水俣病事件から生まれた知恵の言葉を伝える曲を作っています。これらの知恵の言葉は素朴ではありますが、それぞれの人がそれに頼って水俣病事件を生きのびてきた「希

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

望」の言葉であり、「近代日本の耳の衰弱」²²のなかで聞き取られなくなった日本庶民の生き方、声音を伝えるものではないかと思われます。

おらこしこ²³ 詞・曲 柏木敏治

泣きたいときには泣けばいい 笑いたいときには笑って
世の中全てのさりと あなたは教えてくれました
朝ははよから山仕事 終戦で九死に一生を得ました
残りの人生はのさりと ともきち爺さんは笑いました

おら おら おらこしこ おら おら おらこしこ
おら おら おらこしこ 手のひらいっぱいの水で充分

お金も名誉も要らないと 良い仲間と友だちさえいれば
魚を獲って唐芋づくり 美しい海がそこにあれば
見上げれば満天の星 百万光年前の光
人間ってほんとちっぽけな生きものだと イオマンテンの歌²³を歌いながら

おら おら おらこしこ おら おら おらこしこおら
おら おらこしこ 手のひらいっぱいの水で充分
おら おら おらこしこ おら おら おらこしこ
おら おら おらこしこ 手のひらいっぱいの水で充分
手のひらいっぱいの水で充分

4.2. おわりに

柏木さんの歌や活動に触発され、水俣病事件と「表現」活動について学びを深めていくうちに、わたしは、水俣病事件から今のわたしたちにつながる問題として、近代のシステムのなかで、人々が自然や地域のつながりを忘れ、システムのなかの役割としての自分しか持たず、つながりのなかで育まれた固有名としての自分や、固有名の自分の言葉、表現を失ってしまったことがあるのではないかと思うようになりました。

映画『水俣一揆—一生を問う人々』（土本典昭監督、1973年）や『水俣曼荼羅』（原一男監督、2020年）の映像には、水俣病患者さんとチッソや行政の職員との交渉の様子が残されていますが、患者さんの言葉がいつもそれぞれの固有の表現を持っているのに対し、時代が変わっても組織やシステムに属する人の言葉は、誰々という固有名のない、組織を守るための壁のようなものでしかないことに、驚きを通り越して暗澹たる気持ちにさせられます。『水俣一揆』には、チッソとの長い交渉の夜、川本

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

輝夫さんが島田社長に直接相対して「あなたの家訓、教訓は、座右の銘はなにか、趣味はなにか、一番感銘をうけた本はなにか」と問いかけるシーンがあります。この時、川本さんが渴望していたものは、チッソ社長としての謝罪の言葉、補償の約束以前の、固有名の島田さんとしての言葉であったのではないかと思えてなりません。そして、わたしが、さまざまな人と対話し、聞きあい語りあうなかでしたかったこと、聴きたかった言葉・表現とは、やはり、その人が何を大事にし、どのように生きてきたか、というそれぞれの生の固有性や「主体性」を表す言葉であったのだろうと思いました。

ただし、水俣の場合、ここで言われる生の固有性や「主体性」とは、独立し、個別化された近代的な個人のことでなく、その「表現」についても、ある個人のオリジナルな表現や能動的な主張のことではありません。水俣の場合のそれぞれの生の固有性とは、自然やそこに生きる動植物、同じ土地で暮らす人々とどういつながりを持っているかということから見えてくる〈関係性のなかの固有性〉であり、「主体性」や「表現」にしても、こういったいのちのつながりのなかで「生かされて」おり、どう生きるかを「問われている」というそれぞれの人の「責任」として自覚される〈受動性のなかの主体性〉や置かれた条件のなかで苦悩しつつ見えてくるそれぞれの生きぬき方を表すものであると思われます。

わたしの考えでは、自分がおこなってきた対話を通じた探求やそのなかで生みだされる表現についても同じことが言えると思っていますが、これまでの自分の実践をふりかえてみると、やはり土地の固有性の薄い、都市での対話や「表現」活動に寄っており、対話についても、今生きている人同士の関係性・コミュニケーションとして捉えることが多く、自然のなかの大小のいのちとの対話、亡くなっていったいのちやその土地で生きた先人との対話というところまでは視野に入っておらず、柏木さんや水俣の人々の「表現」ほどは深められていなかったような気がします。

このように、柏木さんや水俣の人々の「表現」に触れ、学ぶところの多かった反面、都会だけでなく、現代の社会のほとんどの場所で、土地のコミュニティや自然とのつながりが薄れていき、コロナ禍以降のAIやデジタル技術が人間のコミュニケーションに浸透してくる超近代的なデジタル情報社会のなかで、一体どのような対話が可能であり、「表現」の深みが生み出しうるのかが、わたしにとっての今後の課題となりそうだ、とも思っています。

【謝辞】 この小文の執筆にあたり、取材に協力してくださり、資料を提供して下さった、柏木敏治さん、水俣病センター相思社のみなさんに感謝いたします。また、柏木さんには、この小文に曲や歌詞を紹介・掲載することを了解いただきました。

【註】

1 柏木さんの全楽曲については、筆者らが柏木さんへの聞き取りと資料収集を行い作成した『柏木敏治楽曲集』を参照。

2 笠木透さんについては、鶴野祐介『子どもの替え歌と戦争-笠木透のラストメッセージ-』、子

【水俣を歌う、柏木敏治さんの活動】

どもの文化研究所、2020年、第3章を参照。

3 むかし水俣市袋岡山という地区に人を募って入植したという歴史があり、その入植地を袋岡山開拓団と呼ぶ。

4 鶴見俊輔「近代日本-水俣病への道」、『水俣へ 受け継いで語る』、岩波書店、2018年、21頁。

5 「かわいらしい」という意味の水俣弁。

6 ほんまなほ「マイノリティの〈こえ〉と表現」、研究フォーラム「語り継ぐ、水俣と表現」（2023年12月9日、大阪大学）での発表を参照。

7 「水俣・本願の会」座談会、「魂うつれ 受難の底から湧き上がる思想」における緒方正人さんの発言、『環 歴史・環境・文明』（特集 水俣病とは何か）vol.25、藤原書店、2006年、161頁。

8 前掲書、同頁。

9 前掲書、同頁。

10 緒方正人、『チッソは私であった 水俣病の思想』、河出書房新社、2020年、10頁。

11 前掲書、65頁。

12 上記座談会における石牟礼道子さんの発言、『環 歴史・環境・文明』（特集 水俣病とは何か）vol.25、藤原書店、2006年、162頁。

13 前掲書、163頁。

14 前掲書、同頁。

15 上記座談会における杉本栄子さんの発言、『環 歴史・環境・文明』（特集 水俣病とは何か）vol.25、藤原書店、2006年、165頁。

16 前掲書、181頁。

17 前掲書、167頁。

18 緒方正人さんの言葉、前掲書、163頁。

19 べてるの家の当事者研究の合言葉、当事者研究の理念集（https://toukennet.jp/?page_id=13989）より。

20 『環 歴史・環境・文明』（特集 水俣病とは何か）vol.25、藤原書店、2006年、167頁。

21 前掲書、168頁。

22 石牟礼道子、「形見の声」、『水俣から 寄り添って語る』、岩波書店、2018年、192頁。

23 「私は、これだけ（でよい）」という意味の水俣弁。

24 緒方正人さんによる「イヨマンテの歌」の替え歌。「イオ」とは水俣弁で「魚」を指す。